

## 本木昌造 130 回忌に寄せて

国際印刷大学校長  
九州産業大学名誉教授  
工博 木下 堯博

2005年9月3日、本木昌造130回忌が長崎市鍛冶屋町の菩薩寺大光寺で開催された。近代印刷文化の創始者本木昌造先生により開花した印刷産業は情報化社会の一翼を担う産業として成長を続けている。墓参の後、本木昌造顕彰会会長の内田信康氏の挨拶により法要が執り行われた。

法要終了後、長崎県印刷工業組合50周年記念式典と記念祝賀会が料亭「花月」で実施された。

10年前の1995年9月2日、本木昌造120回忌を記念し、長崎市の東亜閣で記念座談会が開催された。この座談会には著者の他、長崎県・市の行政の博物館担当者、諏訪神社宮司、大光寺住職、郷土史作家、長崎県印刷工業組合理事長岩永義人氏はじめ担当理事の出席があった。この目的は本木昌造を中心とした印刷博物館の建設運動を展開することにあった。この座談会でわかったことは、たびたび、本木昌造を中心とした印刷博物館建設の話が出ては消えるということで、今日まで幾多の先輩の努力があったが、実現出来なかった。

1996年中国印刷博物館（北京市）、1992年韓国清州市古印刷博物館、1990年天草コレジョ館（熊本県河浦町）、2000年凸版印刷の印刷博物館（東京都）、新聞博物館（横浜市）など、この座談会を行った1990年代の10年間に日本を含め近隣諸国で多くの印刷の博物館が設立された。

2003年5月23日、長崎県印刷工業組合の総会の際、佐世保シティホテルで「世界の印刷博物館に関する調査研究（第2報）」と題し報告したが、最新のIT技術を導入しているポルトガルのバーチャル印刷博物館のあり方を研究調査することが必要であると述べた。この第1報は長崎印刷組合史（1998年刊）で主な各国の印刷博物館についてまとめた。1995年8月26日の長崎新聞で本木昌造120回忌を記念し、世界の動向に歩調を合わせ「印刷博物館建設を」と題し、文化欄に投稿した。その後、長崎県印刷工業組合内田信康理事長のもとで2003年10月「日本の近代活字・本木昌造とその周辺」の約450ページに及ぶ著書が上梓された。この書籍は「造本装丁コンクール展」で特別賞、「世界で最も美しい本展」で最優秀賞として選ばれた。

2005年9月9日からシカゴで開催される print05 展ではスミソニアン国立博物館からウィリアムモーリスの木版の挿絵などの展示が行われる。デュセル

ドルフ市で開催された drupa 展では毎回、ゲーテンベルグ博物館の出展が行われるが、今回の print 展では印刷史に関する初めての展示となる。

長崎県印刷会館（長崎市出島）の3階には小規模ながら活字を中心とした印刷の展示室があり、小・中学生を対象とした印刷実習の場を開放している。これは drupa2000 のとき、ゲーテンベルグ生誕 600 年祭がゲーテンベルグ博物館を中心にしてマインツ市で開催された時、特設の会場がライン川のほとりに設置され、小学生が印刷の実習をしていた。このように「印刷」を次世代に引き継いでいく大きなうねりが世界的傾向である。

2005年7月、韓国の印刷会社から講演を依頼されたが、会社内の1階に印刷博物館を開設しようと準備中であった。このように印刷技術が多角的に発展する中で、その原点を見出すための印刷文化の偉大さを次世代にバトンタッチしていく潮流がある。日本でも10月27日の「文字の日」の制定があり、我々は印刷文化を国民に広く普及していく義務があろう。

この小論は「印刷ジャーナル2005年9月15日号に掲載されました。

（注）本木昌造120回忌の小論は長崎新聞1995年8月26日発行です。

（2005年9月3日本木昌造先生130回忌 於、大光寺）